

## 朗読の世界を

## 自在に演出

## 河崎 早春 さん



河崎 早春（かわさき さはる）  
俳優、フリーアナウンサー

オリジナルサイト「ことばの国」  
<http://www.otto-int.com/kotobanokuni/>

二十代始めに、南米音楽を中心としたコンサート司会をする中で詩の朗読を始めたのがきっかけで、朗読の世界に入り込む。

本を読むというスタンダードな朗読を続けながら、演劇のような演出や、ジャンルを越えて異分野のミュージシャンや芸術家とのコラボレーションを実現し、朗読の枠を超えた自由な世界を創りあげ、多くの人々を魅了し続けている。

作家の息づかいまでを再現したいという想いとは別に、シヨートシヨートや現代物などは遊び心を加えて思いっきり楽しむ。

インタビュ어의なかでも、暖かく人を包み込む語りで魅了する河崎さん。「年齢を重ねるほど読みたい作品が増えていく」と、河崎さんの朗読の世界は、ますます輝きと深みを増していく。

「十六年の青山学院で過ごした日々は私の原点です」と、インタビュ어의最後に、母校への熱き想いを色紙に残してくださいました。

## プロフィール

青山学院初等部、中等部、高等部を経て大学文学部日本文学科1977年卒業。劇団テアトル・エコー付属養成所三期生。俳優、フリーアナウンサー、ナレーター、インタビュアー、CMタレント、講演会の講師、等々その活動分野は多岐にわたっている。朗読の窓「驢馬の耳」主宰。シアターX名作劇場ほか、小舞台を中心に活動。2004年ギイ・フォワシイ演劇コンクール最優秀賞受賞。

（主な著書）「おしゃべりなスリッパ」（PHP研究所「感動のしかた」（明日香出版社）「みんなに喜ばれるパーティの企画・演出・司会」（池田書店、共著）

## 変化球の企画で、朗読をより身近に

二年ほど前に河崎さんの朗読の会が青学会館であった時に、校友の方だし、どんな会だろうと興味を持って出かけました。朗読というと、椅子に座って本を読むだけというイメージしかなかったのですが、実際には照明と音楽に大きな布をアレンジした背景、さらに、聴衆に向かって語りかける様子は、まるで舞台を観ているようで、とても新鮮な驚きがありました。河崎 それは、「ふしぎ不思議」というタイトルの会ですね。照明や音響に頼らず、奇をてらわずにやるのが朗読の王道だと思つのですが、多くの方に朗読の世界を知っていただくために、「こういうのも朗読なのよ」と、一回置きぐらいに、役者同士やミュージシャンと組んだり、展示会の会場で絵画やオブジェなど様々なアーティストとのコラボレーションを楽しむなど、変化球の企画をいれているんです。

たとえば、ある時はお三味線による「猫ふんじやった」をバックに、全部猫だけのお話を集めてやるとか、「ねこNEKOネ」、「JAZZと大人のお伽噺」、「2人の爺いさんと2人の別嬪さんの朗読会」など、ちょっと楽しいタイトルを付けたら、いろいろと実験しています。

個人の活動の他、二〇〇一年に友だちと二人で結成した「驢馬の耳」での活動もしています。

### いつ頃から朗読を始められたのですか。

河崎 大学を卒業してすぐ、テアトル・エコーという劇団の養成所に行きました。その時に朗

読の発表会があつたんです。それをたまたま音楽関係の方が聞きに来ていて、「司会をしませんか」って声を掛けられました。南米から来日するミュージシャンのコンサートで、司会だけでなく、詩を朗読したり、インタビュアーをする役者の卵を探していたんです。私にとって初めての仕事は朗読がきっかけでした。今でもその仕事は続いているんですよ。

最近では日本各地で朗読の会が盛んになって、聴衆が増えているようです。

河崎 そうです。今は日本全国で、いろいろな方が朗読の会をやっていますが、どこも盛況で驚きますね。昔から「朗読をやりたい」と言っていたんですが、「こんなマイナーなものは、お客さんがいないですよ」とか、「需要がないで



ギィ・フォアシイ演劇コンクール優秀賞受賞 (2005. 2. 15)  
「ストレス解消センター行き」(右が河崎さん)

すね」と言われ続けました。でも趣味ですつと続けてきて本当に良かったと思っています。

### 作家の息づかいまでも伝えたい

朗読の魅力はどんなところにありますか。

河崎 演出から演じるのまで一人で全部やらなければならぬところでしょうか。そしてお客様との一期一会ですね。昨日のお客様がワツとここで笑ったから、じゃあ同じようにやったら今日も笑つかないかと思うとまた違つんですね。全然反応が違う。だから、お客様が一緒につくってくださるといふか、共同作業という感じですよ。小さな会場ですと聴衆の細やかな反応まで伝わってくるでしょうね。

河崎 マイクを使わないで生の声を聞いていただけで小さい所のほうが、息づかいや皮膚感覚までが空気を通して全部伝わっていく感じがありますね。

どんな感想が寄せられますか。

河崎 「朗読つてもっと退屈だと思つていました」といふ方が多いです。「自分が読んで、こういう作品だなと思つていたのが、聴いたら全然違った」とか。

目で読むのとはまた違った楽しさがあるんです。新たな発見といふか。私も、「えっ、これは朗読には向かないでしょう」と思いながら聴きに行ったらとても面白かったことがあるんです。「ああ、この作品ってこういう魅力があったのね。私、読み過ぎていた」って。同じ作品を何十回も何百回も読むでしょう、一回さつ



原田宗典作「秘密」(2003.11.1)

と読んだ人よりも理解の度合いが違つたんですね。読み手の体を通して言葉が立体的になる。すると、聞き手が読み切れなかったいろいろなものが見えてきたりする。作品のイメージを読み手と聞き手が共有する楽しさっていうのかしら。

**読み手がどんな息の吹き込み方をするかで、同じ作品でもいろいろと違う世界が楽しめるんですね。ところで、どんなジャンルの作品を朗読されていますか。**

河崎 日本文学科出身ですから、大正、昭和あたりの文学作品が自分でも好きで、一番読んでいきたいと思っています。他に詩や童話、エッセイ、軽いショートショートやSFなどは、自分なりに味付けしたり試したりして、文学作品とは違った意味で遊べるので、また別の楽しさがありますね。

逆に文学作品は、その作家の息づかいを壊さないように、時には句読点までも全部そのまま再現することもあります。いい作品だと素直に表現するだけで、本が助けてくれます。ただ読むだけで、その文章力で聴かせてくれるんですね。

いじらないかわりに、その作家や作品のことをよく知り、読み手の人生と重ね合わせることで作品に厚み加わるように思います。

**文学作品が好きなのは、お父様の影響というところをうかがいましたが…。**

河崎 はい、子供の頃に読み聞かせをすつとしてくれました。小学校低学年までの読み聞かせのリストというのが出てきまして、ズラッとあるんです。よくぞこんなものを読んだと思うんですけども、その中に、たとえば泉鏡花の『高野聖』とか、谷崎潤一郎の『猫と庄造と二人のおんな』というのがあったり…。でも、男と女の話がいつのまにか猫のリリーちゃんのお話に変わったりと、多少父の創作が入って、中身が変わっていたりもするんですね。

高学年になってからは、たとえば、樋口一葉の『たけくらべ』のページを暗記しなさい、というように父親から宿題で出るようになりましたね。それは今でも全部覚えてますね。何度も聞かされているうちに、自分でも好きになつてしまっていたんですね。父が生きていた

頃は、朗読公演はしていなかったたので、それまで生きていてくれればよかったのにね、なんて思っています。

**作品選びは大変そうですね。**

河崎 ええ。もう家中本がドサドサ落ちてきそうになってます(笑)。ただ、とても助かるのは、文学書の場合は、青学の日本文学科の研究室にお邪魔するんです。あとは大学の図書館にも…。卒業してからこんなに使う人も珍しいと思います(笑)、本当に助かっていますね。

**あがり症、でも芝居が大好き**

**卒業後に劇団に入られた動機はなんですか。**

河崎 初等部、中等部そして高等部でも演劇部でした。芝居がとても好きだったんです。ただ、



JAZZ & 大人のお伽噺 (2003.1.11)  
異分野とのコラボレーション





シアターX名作劇場「俳諧亭句楽の死」(2004.13 ~ 18)

それを仕事にしようとは思っていませんでした。実際にアナウンサーの仕事の方が多くて、芝居は仕事というより、好きな作品を楽しんでやっていると感じてました。今でも商業演劇ではなく小劇場の活動が中心です。

私は、人前で演じるのが好きな割には、もともとすこいあがり症なんです。

今の河崎さんからは想像がつきませんね。

河崎 初めていただいた司会の仕事は、もう前代未聞のあたり方でした。劇団時代も、両親が見に来た瞬間に絶句して、私一人オロオロして何もできなくなったりとか、プロダクションに入った時も、仕事の前に必ずオーディションがあるんですが、そこで震えて原稿が読めなくなつて、「そこまであがる人はまだ見たことが

ないから、あなたは向かないかもしれない」と言われるほどでした。二十代のアナウンサーの頃のビデオを見ると本当に硬かったですね。

ただ、あがり症って、人前で話すことが嫌いな人に多いんです。ところが私の場合は、初等部の時から人前でバカなことをやるのが好きだったんですね。遠足に行つて、皆で輪になつたところで、「じゃあ、先生と一緒に踊る人、誰かいませんか?」と言われると、そういう時に必ず「はい!」と手を挙げる。そのくせ、あがり症なんですよ(笑)。

それでも段階を経て、はじめは絶句してしまつたけれど、次には震える程度、そのうちあがつてもこのくらいはできるといふところまで徐々にリハビリしてきました。(笑)。

何歳までリハビリが続いたんですか。

河崎 いまだに続いていますね(笑)。

河崎さんの職業を見せていただきますと、女優、ナレーター、キャスター、リポーター、それに講師もされていますね。

河崎 役者をやっていくはずだったんですが、なぜか経済や医学関係などの堅い番組ばかりやるようになりました。日本テレビの『ご存じますか?』というミニ番組は七年間担当しました。どちらかという土地な番組が多かつたですね。逆に、そういう番組だったから、年齢がいつても生き残つていったということはあるかもしれません。テレビは時間との戦いなんです。何秒前とか。生番組が多かつたので、これが舞台と同じで結構くせになつて。(笑)。

## 青学はいつも自分と共に

初等部から大学まで十六年間に在籍されて、印象深いことや思い出をお聞かせください。

河崎 あまりにも多すぎて…。家が学校の前だったものだから、初等部の時は私が寝坊で遅いと、みんなが家に呼びに来たんですよ。外で二十人くらいがズラズラと「河崎さあーん」って。そうしたら、「一度学校に入ってから外には出ないこと」って禁止されてね(笑)。

中等部の頃は青学でも学生紛争があつて、家の前は危険なので通行禁止になり、先生が家まで送つてくださったなんてことがありました。

青学は先生との絆が強くて、お友達同士も、べつにクラス会とがなくても、家族ぐるみでのおつき合いがずつと続いています。朗読やお芝居を同級生が見に来てくださつて、そこでミニクラス会になつたり。常に青学が自分について回つているという気がしますね。

キリスト教の学校としての思い出といえば、初等部で演劇部のほかに聖歌隊にも入っていました。初等部から大学までずつと毎年クリスマスやベージュエントがあつたので、卒業して初めてのクリスマスなんかはどうしていいかわからないほどでした(笑)。学生時代は中等部にいらした宗教主任の笹森先生の教会に通つていて、結婚式も笹森先生にお願ひしました。思春期の頃に、人間はどうして生きるのかということをお友達とディスカッションしたりしたことは、やはり宗教があつたからだと思うんで

す。そういうことを本当に真面目に考えたというのは貴重なことだと思いますね。

**大学では、どんな思い出がありますか。**

河崎 もうひたすらフィギアスケート部で、毎日毎日練習にあけくれ、インカレにも出ました。ですから、大学生活はスケート一色。

今考えると、青字で教えていただいたことがたくさんあります。なかでも、初等部の時の先生は厳しくて、山ほど宿題がでたんです。作文も毎日一つ書かせられました。それから研究テーマに沿って毎週最低一回はレポート提出ところが丸写しするとすぐに先生にわかってしまい、やり直しになるんです。だから、自分の言葉でまとめる癖ができました。

こういうことが社会に出て、企画したり何かに取り組むときに、自然と、まずは自分で調べてまとめるようになりましたね。

**わくわくして面白いことを優先**

河崎さんは、とてもパワフルで、いろいろなことに挑戦していらっしゃいますが、その源になっているものはなんでしょうか。

河崎 何をやるうか、どれを選ぼうかなと迷ったら、まずワクワクするものを優先するんです。フリーで仕事をしていて、向こうから来る仕事を待っているだけだと、流されて終わるなど感じました。これは使い捨てで終わっちゃって、四十代になって、ぶっと自分を振り返った時、「これからは本当にやりたいことに自分から取り組んでいこう。こうすれば、何かしら自分の



(上) 初等部の頃(中央)  
(下) 大学4年の時、卒業の記念に撮影

世界ができるんじゃないかな」と思ったんです。そうはいつても、なかなか形にならないことが多いのですが、私は簡単に諦めないほうなので、何年か経つと、それに関係する人と友達になってネットワークができていたり、情報が集まってきたりして、近づいているんです。

**河崎さんは、おいくつになられても、どんな世界が広がっていく感じがしますね。**

河崎 年を重ねていくと、どうしても固まるんです、思考も体も。思考が固まるということは、今まで自分が生きてきたノウハウやキャリアで次を見ようとするとするんですね。そこから全然違う発想にいかないんです。だから、それを固めないようにしていかないと、新しいものが来ないし、自分も変われない。やはり、いつも新しいもので自分の中を変えていきたいと思えます。

外から見るとずつつと同じように朗読したりしているんだけど、中の感受性とかいろいろなもの、常に変化に対応できるようにしておく。努力しないと固まってしまう、これが怖いんです。こういう仕事をしてると特に。イマジネーションがポンと飛ばなくなるんですね。

**年齢を重ねた分、朗読も変わっていくのでしょうか。**

河崎 ええ、生きてきた分だけ表現って変わってくるから、昔できなかった役を十年後ぐらいにまたやると、できたりするんですよ。素人のお婆ちゃんや、いい民話を語る方がいらつしゃるんですが、きつとその人の生きてきた人生を背負ってしゃべるから、ああいう味わいが出るんでしょうね。朗読って、その人の人生が出てくるんですよ。だから歳を重ねるのも悪くない。実は、歳をとったらこれを読みたいというのがあったんですよ。というのは、女の人が主人公の作品は、若い人とお婆ちゃん結構あるけれども、真ん中が少ないですね。もうちょっとお婆ちゃんになってから読んだ方がいいかなってものが一杯あるんです(笑)。

**「思い」をいつまでも持ち続けて**

朗読をライフワークとして持ち続ける河崎さんから、後輩へのメッセージをお願いします。  
河崎 私は今、「思い」という言葉が好きなんです。今の時代、「この仕事は人気がある」と



NPO 日本朗読文化協会「朗読の日」  
博品館にて (2005. 6. 19)

か、「ちょっとかつこよいから」とか、「これから先タイムリーだから」とか、「皆の話題になる」とか、それだけになっていっている人ってどんどん増えているという気がしています。

私は初等部から大学まで青学で教えていただいたのは自分を大切にすること、他人を思いやることだったと思うんです。人に対する思い、ものに対する思い、仕事に対する思い…それがなくなったら人生はつまらないと思うんですね。すごく抽象的だけれども、何かやりたい夢と一つのがひとつの思いだしたら、その夢をずっと持ち続ける事が大切です。何かやりたいなと思ったことを簡単に諦めない。たとえば、今、子育てしているから、今、年寄りを抱えているから、今、会社に勤めているからと、今できないからといって、全部の思いや夢を捨てることはないんです。人生の中でいっばい諦めなければならぬことはあるけれども、絶対にこれだけは」というものがあつたら、取っておい

河崎 『桜の森の満開の下』という坂口安吾のちよつとおどろおどろしいお話とか、あとはこの九月に読んだ、久保田万太郎の独特の世界ももつと読んでみたい。大学の卒論だった谷崎潤一郎と泉鏡花は、とても好きですが、まだ一度も人前で読んだことはないですね。

河崎さんのこれからの夢とか抱負をお聞かせ下さい。

河崎 このあいだ中等部の演劇部の同窓会をやった時に、当時の戯曲をコピーして（実は全部とつてあるんです）その場で役を当てまして、みんな嫌だ嫌だというわりには結構やるんですよ。そのときに、できればみんなで「青学朗読クラブ」をつくりたいねって話がでたんです。

て、忘れないように時々水をやっていれればいい。そうすれば、ヒュッと芽を出したりすることがある。忘れないでいると、できることがあるんですね。



アンデルセンの作品を  
愛知万博会場で朗読  
(2005. 4. 20)

卒業生だけでなく、先生や父母や在校生も仲間になってくれるといいですね。たとえばみんなで勉強会をしたり、初等部や中等部で読んであげたり、子供達が朗読の公演をするのを手伝ったりする。

今、どんどん日本語の授業が少なくなってきたり、日本語離れしているから、それに逆行したい。だって、学校の中にこういうクラブがある所ってないでしょう？

ぜひ、子供たちに朗読の面白さを伝えていただきたいですね。

河崎 私は、一度始めるとなかなかやめられないんです。文も書きたい、絵も描きたい…という風に好きなことが一杯。でも、どれかひとつと言われたら、やはり朗読はずっと続けていきたいと思えますね。

朗読だったら一人で公演することもできます。日本各地でその地域の音楽家や芸術家と一緒にやったり、誰か面白い人を引っ張り出して、そこで、おしゃべりのコーナーをつくっちゃいましょう。みたいなこともやってみたい。そんなふうに何か手作りの、その地域でしかできない、一回一回まったく違う、朗読を中心とした会が企画できたらいいなと思っているんです。

河崎さんの人を魅了する笑顔とパワフルなお人柄に接して、もっと多くの方々に朗読の世界を楽しんでいただきたいですね。

本日は、お忙しいなか誠にありがとうございます。  
(7月14日青山学院にて)

インタビュアー・文 広報室